

バングラデシュという国名は「バングラ」＝ベンガル人の、「デシュ」＝国、という意味だというが、長いし、今ひとつ良いイメージに響く言葉ではない。日本語ではベンガル国あるいは大韓民国なみに大ベンガル国ではどうだろうか。

「大」という言葉にふさわしく、ベンガル語を話すベンガル人はバングラデシュの一・五億人と宗教がヒンドゥーなのでインドの州となっている西ベンガル州（州都はコルカタ）の〇・八億人を加え二億人を超える大民族だ。ベンガル語は日常会話の話者数では世界五大言語となる。

この人口大国（面積は日本の四割程度しかない）、人口密度大国でもある）を観光で訪問した。外国人でいままで入国するのは、たぶん、経済・社会開発援助などの公的業務の人たちが多かったように思う。それら援助が実を結び、ようやく観光客の受け入れが可能となったのだろう。観光客が国内をスムーズに動き回れるには道路等のインフラ整備が欠かせないからだ。ただ、首都以外

での外国人観光客はまだ珍しい。その外国人が地元の人々の観光の対象になる有様だ。

バングラデシュはほぼ真四角な国で、大河が国内を分断している。西からはパドマ川（上流はインドで、ガンジス川）、北からはジャムナ川（同様、インド名はブラマプトラ川）、東からは国内河川のメグナ川、いずれも日本的な常識からすると大河と呼ばれてよい。これらが国土のほぼ中央で合流し、南流のちベンガル湾に注いで、国土を田の字に四分割しているというのが簡単な図だ。

すべての大河の河口近くの沖積平野にあたるから、国土は平坦で、見渡す限り山らしきものは見えない。ベンガル湾に面する低平地は洪水あるいはサイクロンの高波のたびに浸食あるいは陸化を繰り返すという。そこは農業利用がしにくく、広大なマングローブ樹林地が広がり、世界自然遺産となっている。ほかはほとんどが農地といってよい、大農業国だ。

首都はダッカ。ダッカは四分割の東北部分にある。国土をぐるっと回る（反時計回り）には、まずは西へジャムナ川をわたって、さらに南へパドマ川を渡

ることになる。いずれも数キロメートルの川幅で、日本の援助で長大橋が架けられている。ダッカへ斜めに戻るにはいまは渡し船なので、観光客は国内線航空機の利用となる（乗っていたバスはフェリー利用で後から着く）。道路を見て、大河を渡るのが一番の観光になってしまう。残りの東南部分は四角の右端からさらに南に垂れ下がり海岸線を増やしているが、そこに第二の都市チッタゴンがある。バングラデシュ唯一の国際貿易港だ。第三の都市クルナは西南部分。

開発援助されて、産業はすべて前記の国道沿いに立地することになる。原料と製品の輸送には整備された道路が不可欠だからだ。国道沿いの車窓からみる風景で、ベンガル人のすべての経済活動がわかるといつても過言でない。

主要製品はまずは煉瓦だ。焼成工場（作業場）は国道から見える範囲にある。煉瓦の材料の粘土は工場の周囲のもと水田から採取する。燃料用の石炭は外部から搬入する。この国でも公害対策は当然あり、煙突の最低高さの規定があるので、高さが揃った作業場群になる。製品の煉瓦はトラックで建築の現場に搬出される。セメントも砂利も鉄筋も道路際にならべて売っている。木材も丸太

で売っている。太いものは家具などの木工材料製材用、細いものはたきぎ用だろうか。ベッドなどの製品家具も路側展示販売されている。以上が「住」関係。瓦工場には特別に見学できた。

衣食関係は消費者市場がある。これはほかの発展途上国と同じだ。

個人が買ったものは自宅への運搬手段が必要だ。自転車でリヤカー状にひく台車の脇板がなく底板だけとなっているものが多数行き交っている。板は縦一・五メートル横一メートルくらい、底板といっても両車輪のすぐ上の高さだ。荷物の用がないときは人間も四人ほど乗る。人間専用はリキシャだ。自転車で幌つき二人乗り二輪車を「曳く」タイプだ。以上は自転車改良型で、動力は人力だが、国土が平らなので何とか実用になっている。ダッカなど都会部では動力車がある、当然だが。小はミゼット型のもの



から大は大型バスまで、すべてボコボコの年代物だ。バスは日本の定期バス観光バスのお下がりが多い。〇〇市交通局とか△△観光などの漢字名が残されている。

話は脱線するが、この日本からの中古車車体漢字現象では過去訪問したロシアシベリア、ミャンマーでも同様の事情だった。ともに右側通行の車道なので、右ハンドルの中古車は不便そのもので、たとえば、バスは中央線のほうに降りなければならぬ。ミャンマーでは以前は左側通行だったものを一夜にして右側通行に強制的に変えたという。それでも、東南アジアの他の国の左ハンドル中古日本車よりも日本で中古になった日本車が好まれるのだという。日本人は車を大事に乗るから、中古になっても、性能がよいとのこと。車体の漢字が日本で中古になったことを証明しているので、そのままにしているのだろう。

川の国なので、水上交通も盛んだ。ダッカまで貨客船で支川を遡ることができ、それ用の河港（ガート）が旧市街に近い。河岸にダッカという都市が栄えたのだろう。クルナには小規模な河港があるが、土砂運搬船の積み卸しにひと

りひとりが頭上の籠で運んでいた。人件費の安さが機械化自動化を遅らせている、というより、絶好の職場を機械に譲り渡すことはない。

以上、書かなかった観光資源としては未開拓の同国だが、首都で日本人観光客に説明されるのはダッカ日航機ハイジャック事件だ。昭和五二年、日本赤軍にハイジャックされた日航機が強制着陸させられたのがダッカ国際空港（当時）で、都心からいまのジア国際空港への途中にいまでも残っている。日本と同国との数少ない関係のひとつでかつ観光対象となっているのは仕方のないことなのだろうか。

